

好（よ）い機会（きかい）、
好いチャンスとは、
決して偶然にしか
とらえられないものではない。
いま、そのことを、
好い機会とすればよい。

照れば耕（たが）やす好い機会―。
降れば書を読む好い機会―。
病めば反省する好い機会―。
花が散るのに気づいたら、
無常を感じ、
ひたすら聞法にいそしむ
好い機会―。

活（い）かせば、
どれもが好い機会―。

寺川幽響先生
（伝道誌「きょうだい」前主

2008 本山参拝親睦旅行

9月22日（月）

23日（火・秋分の日）

○本山お彼岸法要参拝
○龍谷大学所蔵国宝図書等特別拝観
○「湯の宿松栄」での親睦会 他

*今からでも参加できます。
どうぞお気軽にお申し出下さい。

インド仏跡巡拝の旅 ①

― 釈尊の聖地を訪ねて ―
副会長 森 勝昭



（今回も瓜生津先生
長（前京都女子大学学
長、真宗学）に率い
られ、二度目のイン
ド仏跡の旅のご縁を
頂いた。
宇賀野区長在任
中であり、区総会を
一ヶ月後に控える中
で、副区長や会計さん達に了解を
頂き、感動の旅をすることが出来
た。
北は北海道から南は九州までの
旅行仲間49名（再会者数名）、
添乗員3名、現地ではバス2台の
大所帯となった。
釈尊のご生涯においていくつ
かの重要な節目の地があり、イン
ドではそこを四大聖地・六大聖地・
八大聖地などと呼んでいる。
今回は、釈尊のお生まれになつ
た生誕の地であるルンビニ（ネパ
ール領）、釈尊が「阿弥陀經」を
説法された地である祇園精舎・舎
衛城、釈尊の入滅の地であるクシ
ナガラ各聖地を巡拝した。
ブッダには、釈尊悟りの地である
お説教をされた釈尊が初めて人々に
お説教をされた釈尊が生涯の大半を過
ごされたラジギール（王舎地）を過

訪問していただくので、これで八大聖
地の内六大聖地を巡拝させて頂い
たことになる。
日程を追いつながら、インド・ネ
パール・ヒマラヤの紀行報告をさ
せて頂きます。
2月1日（初日）
中部国際空港から、タイ航空に
てバンコクへ。ここで、関西空港
出発の4時間、次のインド・デリー
行きの乗り継ぎ待ち時間があり、
空の港内には、日本人向きのラーメ
ン、うどん、すし店などが多くあ
り、ここで夕食をとった。
一杯やったり、ギョーザを食べ
たりして時間をつぶした。時あた
かも、中国産のギョウザ騒ぎの最
中であつたが・・。
19時50分にインド・デリー
に向けて出発。
22時50分に着いたが、ここ
からが大変で、入国手続きに1時
間30分ほどかかった。
く、担当もあわてることなく、
ロビーには人々があ
ふれていて、作業を
びり（？）と作業を
やつている。
着いたのが、真夜中
の1時30分。
まずはつかれた！



題材法話

前号からの続き

○他力浄土門の世界

仏教は、六道輪廻の鎖に
つながれて、迷い続けてい
る人々の目を開き、迷いの
世界から抜け出る道を示す
教えでした。

その道は大きく二通りあ
り、「自力聖道門」と「他
力浄土門」の道です。

自力聖道門は、修行等に
より、自力の力で迷いを断ち
切り、悟りの世界を得よう
とする世界ですが、それが
かなわない凡夫のために、
如来の本願である、他力救
済の浄土門があるのです。

自らの力で迷いを断ち切
り、悟りの世界を得ようと
する自力の世界に対して、
煩惱を断ち切ることの出来
ない私が、煩惱を持ったま
まで救われていくという他
力本願の世界は、なにか理
にかなっていないように見え
ますが、これを、

「横超」と味わっ
ておられます。

○横つ飛びに
超える世界



ある一匹の虫が竹の中に
閉じこめられました。虫
には上へはい上がる習
性があり、その虫もなんと
か外に出ようと、上にある
節を食い破るのですが、そ
こにはまた次の節があり、
あいかわらず竹の中の世
界でした。
さらに上へ上へと節を食
い破り、登っていくのです
け、容易に竹の世界から抜
け出るところはどうでしょ
う、あるときふと横から一
筋の光が差し込まれ、その
誘われるままに横へと進ん
だならば、一足飛びに外の
世界へと超えることができ
ました。
虫にとつては、たてに進
むのが道理にあって、たて
の世界なのですが、その道
理では、はかり知ること
できなかつた横に超える世
界により救われたのです。
これが一つひとつの節を食
い破り、たてに迷いの世
界を超えようと、自力聖
道門の世界です。
これに対して、



阿弥陀さまの呼び声によ
て、横に一足飛びに迷いの
世界を超えるのが、絶対他
力の浄土真宗の世界であり
ます。

○白い蓮の花のような人

このように、他力の信心
を喜び、五悪趣という迷い
の世界を超え出ることで
讃えて下さいます。
讃えて下さいます。4句一切
善悪凡夫人聞信如来弘誓
願、仏言広大勝解者、是人
名分陀利華、一切の

善いも悪いも関係なく全
ての人々は、阿弥陀さまの
願を聞き信じるならば、お
釈迦さまはその人を「仏教
の最高の理解者」と呼び、
また「白い蓮の花のよう
な人」と讃えて下さいます
と親鸞さまは喜んでおられ
ます。

ここに「聞信」という言
葉が出てきますが、浄土真
宗では「聞即信」といわれ
るような聞きと信、

そのまが信心な
のです。
つまり信心とは、



阿弥陀さまのご本願によ
てこの私が救われることの
いわれをそのまま聞くこと
です。

その聞くことにより阿弥
陀さまの心を受け止めるこ
とができた人を、仏教の最
高の理解者「勝解者」と呼
ばれるのは、やはりお釈迦
さまが本当にお説きになり
たかつたからです。
えだつたからです。

蓮の花は、きれいな水の
中や、水はけの良い場所に
は育ちません。
黒い汚泥の中で、その汚
泥を吸収しながら、それ
にけつして染まることなく
純白の華を咲かせます。

煩惱の泥にまみれながら
も、その煩惱を断つことも
ないまま、南無阿弥陀仏
の純白の信心の花を咲かせ
ることにより、お釈迦様か
ら「分陀利華」とほめて頂
くのです。

それはまるで幼子がお
母さんから「よいこね。よ
いこね」と頭をなでて頂い
ているように、ほつ
と安らぎを感じます。

7月例会

住職法話より

